まれでまちを動かしていきたいっていうのが僕のやりたい教育なんです。

こんな感じで 15 時間提案した内容をまち長や教育長に提案していたのですが、昨年度末に中学生たちに意見を聞いたら、提案は面白いんだけど、提案したからにはやってみたいと。正に、上田先生がおっしゃったように、まずやってみるっていうことを中学生たちは要望してくれました。

僕は本気で今年は実現しちゃおうということで、9 月 18 日に、昨年商店街の空き地でこんなことやったら盛り上がるねって 10 個のアイディアをもとに、実際商店街の空き地でイベントをやりました。

平日の真っ昼間に授業時間 5 時間を重ねてもらって、3 年生 84 人が、普段誰も通らないシャッター街の中でカフェをやったり古着屋をやったり、ドクター屋台っていう宮崎の総合診療医を呼んでもらって健康相談をしたり、イベントをしていました。平日の真っ昼間で人は来ないってことだったので、老人クラブに中学生 3 人夏休みに営業に行って、私達に会いに来てくださいって営業したりとか、お金がないので中学校 1 年生が寄付を募りに行ったり、僕らが 10 万円中学生に出資をしました。お金がないと何もできないので。

このお金を元手に、カフェの仕入れをしたり、みたらし団子を仕入れて焼き方を教えてもらったりということをしました。

これが宮崎県都農町にご勤務されている総合診療医 宮崎大学医学部の吉村教授に直々に来てもらって、1 日おじいちゃんおばあちゃんの健康相談をしたっていう事業になります。

こんな感じで、中学 3 年生が直々に道の駅の駅長のところに協賛金の営業をして、3 万円ゲットしていただいて、まち長とかのところにも行って告知をして絶対来てくださいねっていう営業をしました。

当日こんな感じで、1000 平米ぐらいの砂利敷きの空き地で炎天下の中、中学生たち 84 人で販売しまして、売り上げが合計で 19 万円。利益で 11 万。これ、マルシェとかで店出した人は分かると思うのですが、結構な数字で、しかも平日の真っ昼間 150 人ぐらいしか来なかったんですけど、

かき氷売り切れ、みたらしだんご完売、カフェは途中でカップが無くなって買い出しに行くぐらい。かなり盛況で、経費も全部精算して利益が 11 万。新聞にも載りました。

今、授業で継続してやっているのは、この 11 万は僕らが 10 万円出資しての 11 万なので、貸したんだったら 10 万返して貰わきゃいけないよねと。

僕は 10 万出資したので、11 万全部皆で使っていいから利益処分案を考えてもらっています。

ただ、その 10 万円の出資は、何で僕らは皆に出資したと思うっていうことを問いかけています。この答えが多分、上田先生がおっしゃっている Unlock Your Potential のポテンシャルだと思います。僕は可能性にかけて 10 万円出資したんだよと。それに見合うものは皆どう使うのかと。

お小遣いを聞いたら、大体月 2,000 円から 3,000 円の子が多かったので、昨日の授業で「1,000 円ってどのぐらいの大変さみたいな感じかな。」「いや、結構でかいよ。」みたいな、「すげえ。」みたいなことを言ってくれたので、何に使うか皆で納得する使い方を考えましょうってことで、昨日は、1 人当たり 1,000 円は自分でもらう。文房具、本に使おうかなと。残り 300 円を皆で集めて学校に木を植えようという提案をしていました。

これも、出資して株主に利益処分案を報告するというのは、立派なキャリア教育になるんじゃないかなと思ってそんな教育をしています。

あとは小学校とゼロカーボン、2050 年のテーマですよね。議員さんとまち長に僕、聞いたんです。2050 年生きてますかっていう話を。まあ危ないよねと。

そのときのことを当事者で考えられますかっていう意味でいくと、ゼロカーボンを考えるべきは小学生じゃないかっていうことで、小学生の推

進チームを作って、週1回、年間5、60時間議論をして、木と花を植えるっていう政策提言をして、2年目は100万円の予算を申請して可決いただいて。

そこでさっきの空き地でみちくさ市というイベントをやったりしていました。商店街のおじいちゃんたちと話し合いながら、木と花でまちを元気にしようということで、毎月1回開催をしておりました。

あと、最後に中学生で部活を作っています。「まちづくり部」って多分日本では唯一だと思うんですが、僕のオフィスには毎日中学生が7人来て、動物園みたいな騒ぎになっています。

最初、まちづくり部だからまちづくりやろうということで、市場に出て、実際に売り上げを上げて稼ぐのは楽しいし、まちづくりに貢献できるねっていうことを知ったんですが、やっていくうちに、まちづくりとかだんだんどうでも良くなってきて。

僕、学校の授業でも彼らに会うんですけど、全然違う顔するんですよ。ちょっとおすましな感じで。まちづくり部で来たときに「なんであんな結構いい格好したの？」みたいな感じを聞いたら、「学校じゃ、ああいう顔しなきゃいけないんだよ」と。

家帰ったら、家ではこういう顔しなきゃいけないしね、みたいな。

要は、このまちづくり部だと素を出せるからいいんだよねっていうふうに言われて、今日のテーマにもつながると思うんですが、ここは皆の居場所なんだなっていうふうに思えて、さっきの授業でやったような、みちくさ市で出番を作って、日々はこういう居場所を作るっていうのが、僕が今、過疎地でやっているところです。

ただ、過疎地1万人のまちでやっていてもなかなか広がらないので、今日こういうような場に出させていただいて、いろんな方のお話を聞きながらですね、共通項はもっともっと話し合いながら、全国でこんな動きをできればいいなと思ってやっています。

今、高鍋町というところですね。

高校生大学生と、こないだNHKにも出てたんですけど、今度は駅をリニューアルして駅を高校生が運営しちゃおうということを今やらせていただいていますが、この進捗は次回機会があればご報告していきたいと思っております。以上になります。ありがとうございます。

▽上田：

どうもありがとうございました。素晴らしいですね。何かたくさんのヒントがあると思います。

高等学校で探究科っていうのが正式な教科になっていて、ここでは、子どもたち、まちそのものが、自分のフィールドになってるんですよね。

そう考えると、逆にその1万人の規模っていうのは自分がそこにいるっていう存在価値が実感として分かるっていうか。

だから、自分が何かアクションを起こすとちゃんとリアクションが返ってくる。そしたらまたやりたくなる。だから、全力でやることが、実はこんなにも面白いんだと。しかも、お金も儲かっちゃうみたいな。

自分で稼いだ1,000円っていうのは、親からもらう1,000円とは全然違うと思うんですよね。そういう感覚も小さい時からやっていくっていう、本当ラッキーにも総合学習なんかでプロジェクト系のいろんなものをやれるっていうことが、すごく大事になってきていて、今回その出番というのが一つのキーワードなんです。

けれども、私は大学の方でステージを作ろうと。ステージが学生を育てるっていうことをずっとやっていたんですね。

ステージ拡張理論というのを作って、ステージを最初はどんどん小さいところから大きくしていく、そのうち自分でステージを作っていくっていう。

つまり、ステージに乗っかるということは、出

番なんです。出番を待っているだけじゃなくて、ステージという一つの場を作って出番を作っちゃう。ですから、今日のお話は場作りなんですよね。場がパワーを持ってくる。

1人1人の子どものパワーというよりも、場にパワーを持たせると、そこに入ってきた人たちはエンパワーされて、場からエネルギーを持つ。これは循環していくわけですよね。これからどういう場を作るというところで、そこでどんなことができるかっていう。

その場そのものを、場の民主化と言ってもいいと思うんですけど、特別な人が場を作っていくんじゃなくて、多分中川さんも将来フェードアウトしながらもう放っといても、すごい面白くなっていくと。また彼の旅が始まってくるという感じ、その理想的な感じだと思うんですけど。

吉田田さん、お待たせいたしました。
トーキョーコーヒーや、生駒でもチロル堂などすごくユニークなことをやっておられて、中川さんの話とも重なっていくところが多いと思うので、ぜひ楽しみにお聞きください。よろしくお願いします。

▽吉田田：

吉田田タカシといいます。よろしくお願いします。東京とか宮崎とかね、はるばる来ていただいていますが、僕はすぐ近く東松ヶ丘から歩いてきました。僕のやってることっていうのは本当にいろいろあるので、5分で説明しきれない部分があるんですけども今日なるべくお話させてもらいたいと思っています。

吉田田タカシという名前でやっておりまして、本名はお察しの通り吉田です。どこにでもいる吉田タカシなんですけども吉田田タカシっていう名前でずっとやらせていただいています。

DOBERMAN（ドーベルマン）っていうバンドのボーカルを、もう25年以上やってまして、全国、世界各地でライブコンサートをしてきました。日本で有名なフジロックフェスティバルにも何度か出てますし、最近は、とんねるずの木梨憲武さんと一緒に「ホネまでヨロシク」っていう曲を出して一緒に何ヶ所かライブしたりもしました。

ボーカルという一面とはまた別に、講師として色々な大学で教えてきました。大阪歯科大学や、京都芸術大学、天理医療大学などで教えてきました。

ずっとやっているのが、アトリエe.f.t.というアートスクールですね。さっき上田先生にも少し紹介していただきましたが、アトリエe.f.t.というのは、ドーベルマンと同じく、26年やっていまして、大阪市中央区と、生駒の壱分町に二つスクールがあって、200名ぐらいの子どもたちが通っています。

実は僕、15年ぐらい前、アトリエe.f.t.で、体験を通して学べるような教育を作り上げていきたいと思っていたときに、上田先生のプレイフル・シンキングという本に出会ったんです。

多分、出版されたところだったと思うんですけど、2009年にその本を読んで本当に衝撃を受けたんです。僕普段そんなに本を読む方でもないし、本を人に紹介したりもしないですけど、当時mixi(ミクシィ)っていうSNSがあって、そこに上田先生の本を紹介したのをはっきりと覚えています。

▽上田：

そうですか、ありがとうございました。

▽吉田田：

すごく強烈な体験で。当時はワークショップというような言葉もまだ浸透してなくて、例えば、最近よく言われる非認知能力とか、そんな言葉もなかった時代ですね。そういうときにそのプレイフルな学びが、教育の上でものすごく重要だっていうことを書かれた本で、もうこれだ！っていう感じで、僕たちも体験型の教育に思い切って舵を切ったっていうのが始まりなので僕はもう上田先生の教え子と思っています。

▽上田：
　ありがとうございます。
▽吉田田：
　上田チルドレンです。
　アトリエ e.f.t.は、「つくるを通していきるを学ぶ」っていう言葉を掲げてずっとやってきました。子どもだけではなく、子どもから大人まで200名ぐらい居て、子どもたちが何をして、何を学んでいるかというと、何でも作っていいんだよっていうことを学んでいます。
　目の前にあるダンボールで作るような作品だったり、紙粘土をこねて作るような作品であったり、そういうものももちろん自分で決めて自分で作ってもいい。さらには自分の人生とか、この地域とか社会とか、そういうものを全て自分たちで作っていいんだっていうこのことを教えてるんですね。
　学ぶっていうことは、正解を暗記するということだけではなくて、自分たちの判断で考えて作っていく。
　例えば知識を暗記する学習がありますよね。知識っていうのは何のためにあるかというと、テストでいい点数取るためにあるのではなく、自分で考えようとしたときの素材です。オリジナルの考えをしようとしたときの素材集め、それが知識なんですね。
　知識は、本来そうあるべきで、何か自分がやりたいと思う、主体的に取り組みたいと思ったときに、知識が必要になって、知識が必要だと思ったときに、教科書という素晴らしいものがあって、すごく上手にまとめられているというのが教科書であってほしいです。
　教科書を全部順番に覚えなさいよ。っていうのが、勉強ではなくて、自分たちがこれは必要だから学びたいと思ったときに教科書を開くような主体性を引き出す環境を作りたいなと思い、アトリエ e.f.t.で試行錯誤してきました。
　僕たちは正解信仰を捨てるって言ってるんですけど、物事全てに正解があるという、この思い込みを捨てましょうって言っています。
　もちろん数学のテストだったら正解がありますが、人生そのものには正解がないし、自分たちがどのように幸せになっていくかということの全てに正解がないんですね。それを自分で作っていいんだよっていうことを教えている場所です。
　他には、チロル堂っていう、これも先ほど紹介していただきましたが、生駒駅すぐのところにチロル堂っていう駄菓子屋を作りました。
　まほうのだがしやチロル堂っていうのは、何かというとですね、一見普通の駄菓子屋さんですけども、この奥の方はカフェスペースになっていまして、そこで子どもはもちろんですけど、大人もコーヒーを飲んだり、カレーを食べたり、あと夜には「チロる酒場」なる居酒屋になって、大人たちがお酒を飲んだりもできます。

　チロル堂には、ちょっと面白い仕組みがありまして、図を見てもらうと真ん中にガチャガチャがありますよね。駄菓子屋さんなので、もちろんガチャガチャがあるんですけども、これは子どもが1日1回だけ100円で回せるようになっています。ガチャガチャを回すと、カプセルが出てくるんですけど、カプセルの中に、店内だけで使える通貨、チロル札というのが入っています。チロル札は竹でできていて、1枚から3枚入っているんですけど、運が良ければ3枚まで入っています。そして、1チロル、2チロル、3チロルと数えます。札1枚を使って、100円分の駄菓子が買えますので損することはないんですね。最低でも100円を出して100円分の駄菓子が買えて、運が良ければ300円分の駄菓子が買える。それだけではなくて、ジュースも飲めるし、フライドポテトも貰えるし、なんとチロル札1枚で、通常500円するはずのカレーライスも食べられます。
　これはどういうことかというと、困っている子も困ってない子も、どのような子も誰ひとり情け

ない思いをせず、温かいご飯が食べられるという仕組みなんですね。

もちろん、地域食堂、子ども食堂という素晴らしい取組みがあって、今は日本に何千もあります。素晴らしい国だなと思いますが、やり方を間違えると子どもが情けない思いをしたりとか、あそこに行ってるってことは、あの家ちょっと家計が厳しいのかな？といった偏見を生む可能性もあります。

子ども食堂では偏見を生まないように、子どもが情けない思いをしないように、色々と皆さん試行錯誤して取り組まれていますが、そういった課題をリデザインしたのがこのチロル堂です。駄菓子屋なので、当然誰でも来れて、誰でもカレーが食べられるというふうにしました。そうすると 1 日 200 人の子どもが来るんですね。カレーを食べまくるわけですよ。当たり前ですが赤字がどんどん膨らんでいきます。赤字をどう補填しているかというと、大人が一杯コーヒー飲むとか、大人が 1,000 円ぐらいするカレーライスを食べるとか、もしくは夜酒場でビールを飲むとか、肴を食べる等してもらうと、代金の一部がガチャガチャに入っていき、子どもたちのカレーに変わっていく循環システムです。

意外と生駒の方もご存知なくて、デザインというと店舗の内装とかロゴマークとかのデザインと思われがちですが、実は 2022 年度のグッドデザイン賞でこの仕組みが日本一の賞を取ったんです。

チロル堂は、地域の皆さんがそこで飲食するとか、地域の人の気持ちで支えられている場所なんです。どこかから公的なお金が下りてきているわけでもなく、自分たち地域の皆の力によって支えられている場所なんですね。多くの人がチロル堂に関わってくれていて、ただそこで、チロる酒場でお酒を飲むだけじゃなく、絵本の読み聞かせをしてくれる人だったりとか、1 日店長やるよって言ってくれる生駒の人だったりとか、野菜を持ってきてくれる年配の方だったりとか、チロル堂のためだけに、1 畝作ったからって、チロル堂用畑を作ってくれたおじいさんまでいるんです。

そういう方たちの温かい思いで、地域の子どもって皆の子どもやから皆で育てようっていう、そういう気持ちがちょっとずつ醸成されています。実は子どものためにと思ってやっていたけども、気がついたら大人の意識が少しずつ変わっていって、自分とこの子だけ育てるのではなく、昔みたいに地域の子って皆の子やねんから、一緒に褒めて一緒に叱って育てていったらいいよねっていう感覚が少しずつ広がっている場所です。

もう一つ、トーキョーコーヒーっていう別の活動もあります。何か東京のカフェかなと思われがちですが、実は登校拒否のアナグラムなんですね。最近では不登校って言いますが、昔、登校拒否って言っていました。

これが今、文科省の調べによると、小学校中学校で学校に行かない選択をしている子たちが約 34 万人いると。このことを、一般的には社会課題で困った困ったと言われています。

何でこんなに困った子が増えたんだ、問題のある子が増えたんだ、残念な子がなぜこんなに増えたんだっていうふうに言っていますが、僕たちはそれって本当に子どもが残念なのかな？と思ってるんですね。残念な子が増えたのではなく、どんどん公教育が子どもたちに選ばれなくなっているのではないかなと思うんですね。

グラフを見てもらえれば分かる通り、年々学校に行かないって主張する子が増えています。このことに何か僕は疑問を感じていて、実は問題っていうのは、子どもの不登校ではなく、僕たち大人 1 人 1 人の無理解にあるんじゃないかと。時代がどんどん変わっていく中で、教育っていうのは、ざっくり言うと 150 年変わっていません。

正に教育長が言われましたけども、生駒市の大綱にも、今配っていただいた冊子の一番表紙のところにもありますが、ずっと変わらなかった一斉教育が変わろうとしているんですね。先生が正解を知っていて、皆正解を知らんやろうと。今から配るから暗記しなさい、どれぐらい暗記しているかを調べます。この教育をずっと150年やってきたんですよ。

でも、ご存じのとおり時代はどんどん変わっていて、教育現場と社会との間に大きな開きが出てきたのが今の時代で、日本中の教育が今変わろうとしています。

そういう中で様々な子に合った様々な学びができるような教育に変わっていかないといけません。それは、子どもに向けてやることじゃなく、まずは大人が意識を変えないと成功しないんですよ。学校任せではなく、先生がとか、校長がではなくて、僕たち市民1人1人が本当に子どもの将来の豊かさとか幸せとつながっている教育って何なんだろう。本当に偏差値が高いっていうことがイコール幸せなのか、このことについてしっかり話し合わないといけません。

教育と幸せは本当切っては切れない関係です。大人が、幸せっていうのはどういう状態なんだろうかっていう事について対話しないと教育は生まれてきません。

生駒市の教育をどういうふうにするのかは生駒市の未来ってどういうものがいいのか、豊かな生駒市ってどういうまちなんだろうということについて大人が対話しないと、生まれてこないと思うんですね。そういうことをどんどん声に出せるまちになっていくと僕は嬉しいなと思っています。

全国、色々な所で講演して回っていますが、皆に「生駒市ってどんなまちですか？」って言われるんですよ。僕はこれまでちょっとモゴモゴ言ってたんですけど、今日教育長の話を聞いて、これから生駒も思いっきり教育を変えていくんだなという覚悟を感じ、これですごく胸張って、皆ちょっと一回生駒に来てみてください、生駒の教育を見てくださいって言えるようになると思って喜んでます。

トーキョーコーヒーは、大人が楽しみながら、これからの教育・社会などについて学び合い、大人の価値観を進化させるムーブメントです。拠点は現在全国に約400ヶ所あります。子どもにとっては、個性や子どもらしさを尊重され、安心して居られる場所でもあります。たった2年で約400ヶ所にまで広がりました。

それは僕に影響力があったわけではなく、これまで子どもが学校に行かないって言うと、お母さんが取る行動は二つだったんです。

一つは、自分の教育が間違っていたと自分を責める。もう一つは、あの担任が悪いとかあの校長が悪いと学校を責める。この2択しかなかったんですよ。

そうではなく、本当は子どもたちが命がけで訴えてくれていることに対して大人が耳を傾けて、社会こそが変わっていかないといけないんじゃないかっていう考えのもとに、今こそ教育を変えるときだっていうので、広がっていってるムーブメントです。

生駒市では、生駒山の中腹に、僕が少しの土地とボロボロの平屋を持っていて、この場所に毎月50 人ぐらいの人が毎月全国から集まってリノベーションしてるんです。

作業の合間に、子育てや教育について話したりしていますが、大人が楽しんでいる姿を子どもに見せるっていうのが一番のテーマです。

皆でワイワイ楽しみながら、何か汗をかいて、ご飯食べているときに家庭内の相談とか、ヘルプが生まれるような、こういう場所を全国でやっています。

以上になります。ありがとうございました。

▽上田：

どうもありがとうございました。

素晴らしいですね、たくさんのメッセージがあったと思うんです。

正に、学ぶっていうことはインプットのイメージが強いですが、アウトプットなんです。

今4人のお話をインプットだけでは蒸発する可能性があるので、今日聞いたことを、自分のまちに帰ってどういうことをしたいかと。

そのためには、もう少し聞きたいこともあると思うので、4人ぐらいで後ろ前とかで、今のお話を聞きながら、自分が気付いたとこはどこだと、ここ凄かったよねって。ここもう少し知りたいね、ってことを5分ぐらいお話ください。後20分時間がありますので、5分間して、そして質問を受けて、最後のまとめとします。

対話が大事って仰ってましたよね。しっかり聞いたことを考えて気付きを言語化してください。

はい、よろしくお願いします。私達、降りていきますので、必要であれば捕まえてください。どなたかと、どうぞ話し合ってくださいね。

皆さん、後1分ぐらいで、ご質問や、これだけは皆さんに言っておきたいということを私達が回りますので、ぜひシェアしてください。

はい、皆さん、すいません。時間が残念ながらやってまいりました。

一番いい時にですね、皆さんが点数というか%を書いていただいた紙の裏に、今日一番印象に残ったことを一言、自分のためのお土産として書いていただけませんか。今日持って帰りたいメッセージ、たくさんあったと思うんですけれども、裏側に、これはちょっと明日からの自分のエネルギーにしようっていうようなことがあれば書いていただけますか。

その後、少し質問大会をしたいと思いますので、よろしくお願いします。書いていてくださいね。

いっぱいあったでしょうね。思い出すためのきっかけとして、一言書いてください。お昼ご飯のときにちょっと眺めてみると、味わえると思います。

はい、そしたら書いていただきながら、ぜひ今日は4人のスピーカーの方からダイレクトに生の話が聞けますから。10分間ぐらいの間に、せっかくなので手を挙げていただいて。マイク持っていきます。大丈夫ですか。ちょっと考えといてくださいね。

はい、それでは、原井先生がこのグループは面白かったなというところへ行っていただきますので皆さんお聞きください。

▽原井：

先ほど、二つほどお話聞きました。こちらのグループの方から、小学校中学校で、自由に自分たちで課題を見つけて勉強するっていうスタイルをしていても、その後高校大学でまた座学になって、元に戻るんじゃないかっていうようなことを尋ねられました。

お話してたんですけれども、私はスタイルというよりもそこでどんな力が付くかっていうところだと思います。自分で課題を見つけて、課題についていろいろ調べたり、友達と教え合ったりすることで、出来たとか分かったとか、そういう達成感とか満足感を子どもたちは得ることができます。

そのことが学ぶ力、意欲になって場所が変わっても、どんなことを学びたいかどんなふうに学びたいかっていう力は高校でも大学でも生かされて、もっと言うと、人生通じてですね。

私の座右の銘は一生勉強一生青春なんですけども、そういうことをやっぱり小学校中学校で力をつけることで、一生の学びにつながっていくんじゃないかなというふうに思いますという話をさせていただいておりました。

▽上田：

ありがとうございます。もう一チームなんか先生仰ってましたよね。

▽原井：

遠い福島から来ていただいた方のご質問で、アイマスクとか車椅子体験とかをするとどうして

もかわいそうな人じゃないか、そういうふうな子どもの気持ちになってしまうんじゃないかっていう、そこはどんなふうに学校で教育されているのかという話を聞きました。

目が見えないとか体が不自由であるとか点字のこととか車椅子のこととか、その事象だけじゃなくて、例えば当事者の方が盲導犬を連れて学校に来てお話をしていただく機会などもあります。その中で、その人の生き方とか頑張りなどを直接聞いたり、福祉センターの方など色々な立場の方にお話を聞いたりすることで、自分たちも頑張らないといけないし、そういう頑張っている人たちをどのようにして支えればいいのかっていう、そういう自分の思いになっていく。子どもたちって体験することによっていろいろなことを考えながら前に進んでいく。

本当に小学校、中学校の子どもは純粋ですので、学校で体験することの学びは大きいのではないかなと思っております。

▽上田：

ありがとうございます。

お二人のチームに拍手を。皆さんありがとうございました。素晴らしい。

どうですか、他にございませんか。こういうのを聞いてみたいとか、どうでしょうか。

中川さん、どのチームか何か面白そうだったっていうのはありますか。聞いてみたいとかありますか。

▽中川：

都農町より少し小さい竜王町という所で。

▽上田：

お話を聞いてみましょうか。

▽参加者①：

滋賀県の竜王町から来ました。

少し色々と、中川さんに聞かせていただきたい。ここにおられる方ではおられないかもしれませんが、僕は教育出身で、教育ですが福祉の分野にいる人間です。

教育に総合教育を全て任されるという形で、教育からオーダーが出るということを聞いたことがなかなかない中で、教育の部分には携わっていかないといけないし、自分も教育の分野にいるから言えますが、教育分野ってサンクチュアリなところがあって、そこに対して福祉の分野から見て、これ大事ですよ、みたいな何かがあると思っています。皆、あまり頷かないですけど。

もしここに、教育の場に行く人がいたら、これも「なんやねん」と思われるかもしれませんが、僕は両方あって、それぞれのアプローチの仕方が違う中で、その違いの中で変えていかないといけないところがあるのかなと思って、どういうふうに教育の分野とつながって、そこまで入り込めたのかな、というところを聞かせてもらいたいのと、何か竜王町として何か参考にしていくところがあるのではないかな、ということで少しお話をさせてもらっていたところです。

▽中川：

そうですね、教育から入らなかったのがよかったかなって。

僕はまちづくり分脈から入っていったので、たまたま町長、教育長、中学の校長が全員都農町出身だった。県職員としては、奇跡的な巡り合わせだから、都農町を何とかしなきゃ、ってところに共感を得て、総合学習や先生方がカリキュラムをするのが大変そうだったから、枠作れるよ、みたいな話でぬるっと入った。「ぬるっと」が大事かなっていうところはあります。

教育で何か新しい探求をやりましょうみたいなことを言うと、僕みたいなインチキは排除されますけど、まちづくりから入ると結構入れてくれたというのは、ヒントかもしれないです。

▽上田：

やはり出会いの場所ですね。まちづくりと教育が出会ったところで面白いことがわかった。

小林さん、どなたか当てていただいてよろしいですか。

▽小林：

職員の教育に関してのご質問をいただきました。

▽上田：

どういうご質問ですか、それに対して小林さん何か一言お願いします。

▽参加者②：

岩手県遠野市から参りました。ありがとうございます。高齢福祉分野にいるので地域密着のデイっていうところはすごく馴染みがありますけど、その中に病児が入ってきて、上手に交流しながらどっちも支え合っている仕組みで、スタッフの理解とかそこに至るまでに何か壁だとか、そういったものはなかったのでしょうか、ということを先生にお伺いしました。

▽上田：

そうですか。小林さん、それに付け加えていただいていいですか。

▽小林：

ご質問ありがとうございます。

大人と子ども両方を前職で経験しているスタッフは実はいなくて、子ども分野か大人分野か高齢分野かどちらかを専門にしていたスタッフが集まっている、という施設になりますので、お互いのスペシャリティがお互いに教えあう体制をとって、今運営をしております。

▽上田：

どうもありがとうございました。

よく似た活動をなさろうとしているので、今日はすごい参考になられたと思います。ありがとうございました。吉田田さん、どうですか。

▽吉田田：

僕がお話させてもらったのは石川県の加賀市から来られた方で、次回の開催地ですね。

▽上田：

来年、石川県ですね。

▽吉田田：

学校が昔、荒廃した時代に、親御さんとか学校に入ってくることで解決した、というような事例があることを教えていただいて、トーキョーコーヒーの活動は、親が意識を変えていく活動だからいいね、と言っていただきました。少しその辺のことを伺ってもよろしいでしょうか。

▽上田：

よろしくお願いします。

▽参加者③：

来年開催の加賀市です。

家族と子どもがいかにして対話をするかということの中で、金沢の方でしたが、中学校が大変荒廃した事例がありまして、これをどうしていこうかという中で、自宅の方で家族が先生の悪口をよく言われている家庭が多かったということでした。

先生方よりも一度そういう親御さんに学校に来てもらい、学校の窓掃除とか床の磨きとか、学校の机拭きや、掃除をしてもらい、親が自ら学校に入って運動することで子どもがその動きを見ながらこれからは学校を荒れてはいけないな、というようなことで、最終的には学校の荒廃が止まったというケースがあったので、いかに家族含めた意見交換をやっていくことが大事なのかなと思い、吉田田さんと話をさせていただきました。ありがとうございます。

▽上田：

ありがとうございました。

正にそうですよね。吉田田さん、一言それに対してコメントありますか。

▽吉田田：

正にその通りで、教育は確かに学校が専門家ではあるけども、学校に全て任せるのではなく、PTA などの社会教育も大切だし、家庭である家庭教育、この三つが一体となって、市民みんなで子どもたちを育てる、という意識を持たないと、本当の教育というのはできないと思いますし、学校もオープンなのかクローズなのか分かりにくい場所ですよね。

なので、学校はオープンな場所です、ということをしっかり市民の皆さんに伝え、例えば生駒市だと生駒市の人はこの学校に入れますよ、と。いろんな大人を子どもが見るということも大切なことなので、いわゆるロールモデルですけど、こんな職業、あんな職業いっぱいあるな、と。

僕の理想は、何とか準備室とかあるじゃないですか。理科準備室とか、よく使ってない準備室がたくさんありますよね。あの辺に例えば、家具職人を入れたり、デザイナーを入れたりとかして、保健室登校だけではなく、デザイン室登校とか、家具職人登校みたいな感じで、色々な職業を見れるような学校が生まれたら面白いな、と思っています。

ありがとうございます。

▽上田：

どうもありがとうございました。

時間が3分ぐらいになりましたので、皆さんもう一度上がってマイク持っていただいて、少しここで井戸端会議をしようかなって。スライド1枚出していただいてよろしいでしょうか。

▽参加者④：

昨日私、実行委員会発表の場で発言させてもらいましたが、そのときに、言葉としてはっきり言わなかった、言えなかったことがあります。

それは大人社会が子どもたちに対する対応の問題で、教育ばっかり言っているのではないか。これは間違ってないのか！子どもの方がよほど素直だ！子どもに学ぶ、この姿勢を私達が大人の方がしっかり身に付けていかないと、この日本は駄目になる！

私はそう思って、これを言い出すとまた長くなるから、昨日はやめました。せっかく意見が求められていたので、つなぎです。

▽上田：

ありがとうございます。

正にその通りだと思います。今日はやはり大人が変わっていくことによって世界が変わる。

▽吉田田：

生駒市のこども政策課のアドバイザーで入らせてもらっていますけど、正しく今おっしゃっていただいたことが次できるスローガンになると思うので、皆さんも楽しみにしてください。

▽上田：

楽しみですね。

一つスライドを作っていて、一つ戻していただいていいですか。

Playful Spirit（プレイフル スピリット）っていうのは、もう本当に2009年のプレイフル前期からずっと言っていますけど、プレイフルというのは、下にありますけど、本気で全力で場を作っていこう。つまり、楽しく学ぼう。

プレイフル・ラーニングとかプレイフル・シンキングも何か楽しく考えよう、ということではなく、本気でやる、全力でやると、楽しくなってきます。

皆さん、そうです。大変なお仕事ですけど、全力で仕事をやっているから楽しい。

ですから、今おっしゃったように、大人がもっと全力で、そして楽しんでいる姿を子どもに見せなきゃいけないです。やってみせるっていうのが、すごく大事なことで、今日もやってみせていただきました。ちょっと自分もやってみようかな、という、大きなムーブメントが必要です。そのときに面白がることです。面白がって、勇気を持って巻き込まれて、ハマるというか夢中になる。身体的に体が喜ぶようなこういう体験が最近すごく少ないです。

何か新しいことをやりましょうと言って、「もうそれ分かってるからいいわ」、ではなく、「一回やってみようか！」って、巻き込まれて気が付いたらハマってしまっていた、みたいなそういう世界が来ると思います。

最後のメッセージとして、本気になって全力でこれから場を作っていきましょう。場が力を持つことによって、人が集まってきます。なかなか1人1人の場を個人的に演出するのは難しいですけど、場はできます。場っていうのは生きているけど人工物です。だから、場にエネルギーを注ぐと、染まってくる、ということがすごく大事だと思います。

最後1枚だけスライドをよろしくお願いします。

Howは未来！と書きました。

「いや、これもできない。うちのまちではちょ

っと無理だよ。やっぱり生駒市だから出来て、うちはちょっと無理だよ。」ではなく、Can で考えたら駄目です。

Can I do it で考えると、できないです。その前に How を付けます。How can I do it つまり、出来るか出来ないかは議論しない。どうやったらできるだろう、どうやったら始められるだろう。

それも、How can I じゃなくて、We です。How can we 私達がやれば、どうやってやるか。これからの場作りは、How で考えていただきたいな、と思います。

How は未来！というのは、How は前に進めます。Can not はそこで止まります。

本日は皆さんと、きっかけをシェアできたと思いますし、ぜひこれを温めていただいて、How は未来！ですので、小さいところから始めていただきたいな、と思っております。

私の最後のコメントになりましたけど、一言ずつ言って、今日はグッバイをしようと思いますが、よろしいですか。

▽中川：

どうも今日はありがとうございました。

僕も上田チルドレンの１人で、プレイフル・ラーニングから読んでいましたので、今回非常に何か学びも多かったし、宮崎でトーキョーコーヒーをやりたいな、と思いました。ありがとうございました。

▽上田：

素晴らしい。

▽吉田田：

ありがとうございました。

夢みたいでこういうメンバーでこのステージに立てたことが嬉しいな、と思っています。

僕は教育というのは、究極邪魔をしないことと言っていますけど、さっきおっしゃったように、子どもたちって本当に色々なことをもう知っていて、別に大人が偉いわけでもないし、順番に教えてあげなくても、子どもって自分の力で幸せになっていけます。それを支えるような環境を作ることが一番大事だと思っています。

あと、上田先生と同じで、僕は楽しいに命がけ、といつも言っていますけど、大人が楽しんでいる姿を子どもたちに見せたいと思っているので、めちゃめちゃ楽しいまちになっていけばいいな、といつも願っています。

ありがとうございました。

▽上田：

ありがとうございました。素晴らしい。

▽原井：

今日はありがとうございました。

教育大綱にあるように、自分らしく生きる、可能性は無限大だ、と。

全ての子どもたち、人がそう思えるような教育をこれからも作っていきたいと思いますし、本日こうやって、皆さんや登壇者とつながったことが、次の教育のつながり、一歩になっていくのかな、と期待しています。これからも頑張ります。よろしくお願いします。

▽上田：

ありがとうございました。

▽小林：

本日はありがとうございました。

医療職という立場で教育という話の中に混ぜていただいたことが本当に嬉しかったな、と思います。

できることは少ないですけど、今後も頑張っていきたいと思います。

よろしくお願いいたします。

▽上田：

ありがとうございました。

今回のシンポジウムは、今年の最初からスタッフの皆さん方が、子育てという世界と、教育という世界の掛け算をしてみて、何か新しさが出てくるのではないだろうか。だから、まちづくりから始まり、教育の話になっている。

この二つを重ね合わせることによって、ものす

ごいパワーを持ってくる。それから異世代の交流です。

小林さんの実践にあるように、やはりお年寄りと子どもたちが一緒にやる、一緒に物を作ることを通して生きることを学ぶ、とおっしゃっていましたけど、まさにそうです。

そして、自分が主役になって、自分らしく生きる。そういうまちは、私達が一番たくさん過ごしている時間です。そこを大事にして、新しい世界を作って全国に発信できたら、と思います。

最後に、世界は可能性に満ち溢れていますので、How で未来！を作っていっていただきたいと思います。

少し時間が超過しましたけど、どうもありがとうございました。スタッフの皆さん、どうもありがとうございました。